「エクステリア」活かす NewBusiness を取材!!

カフェと中庭のある「調剤薬局」

○群馬県前橋市 元気の森

今回は北関東でも有数の調剤薬局運営会社が、薬局の既存のスペースを「心地よい空間」へとリノベーションした事例を取材した。その薬局では、室内に「カフェ」を設け、「中庭」と「アプローチ」、「ガーデンルーム」も新設。これによって、薬をもらいに来た患者だけでなく、未病で健康相談に訪れる人も、カフェで寛ぎながら自分の体の状態を把握することが出来る。この取り組みは、薬局を単に薬を提供するだけでなく、未病層へのアプローチによって健康への投資価値を見出す場所へと変えて行こうという挑戦であり、まさに健康とエクステリアを掛け合わせた新しい集いの場〝サードプレイス〟が誕生したと言えるのではないか。

群馬県前橋市で「折り鶴薬局グループ」を展開する㈱折り鶴（本社：前橋市平和町1－6－20、井上拓民社長）は、2019年12月に前橋市西片貝町の調剤薬局・元気の森に『らしくるカフェ』を開設。合わせて店舗に中庭、アプローチ、ガーデンルームを設けるなどリノベーションも行った。

元気の森―アプローチ、ガーデンルーム側からの全景

中庭の天井にはシェード（※現在は鳥が入って来るため改良中）

一般的に調剤薬局は病院や医院で診察を受けた患者が処方箋を持って薬を買いに行く場所であり、その多くは医療施設の近郊に開業している。場所によっては、一つの医療機関の周囲に複数の調剤薬局が乱立する姿も見受けられる。また調剤薬局は、医師からの処方箋を持った患者に薬を提供することで成立する、いわば医療機関に依存した「待ち」の経営である。しかしこれからは、それでは生き残れる保証はないと井上社長は言う。

「今までよりももっと患者様が気楽に訪れやすい雰囲気を作り、多くのリピーターを創出しなければならない。そして患者様だけでなく『未病』層であっても、病院に行く前に気軽に訪れることが出来る場所がなければならない」―そんな使命感に基づき開始した事業が『らしくるカフェ』であった。

音楽流れるカフェで健康相談

薬局スタッフはすべて薬剤師だが、音楽の流れるカフェでは白衣の代わりに白いシャツと緑色のエプロンを着用する。和やかな雰囲気の中、訪れた客はコーヒー、健康茶などこだわりのド

かつてデッドスペースだった中庭

リンクを飲みながら、定期的かつ本格的な健康チェックを受けることが出来る。測定内容は、体組成測定、糖化チェック、肌・頭皮チェック、血圧・動脈硬化、ストレスチェックといった内容。さらには県内では3つしかない検体測定室も完備している。その他食品・化粧品・サプリメントなど調剤薬局として厳選した商品の購入も可能。

「普通は薬局に行っても健康相談専用のスペースはありません。しかし『らしくるカフェ』では、薬を渡す時のプライバシーなどセンシティブな部分も守りながら、リラックスしてお話を聞く中で、色々な健康の問題点も発見できたりします。やはりカフェのような柔らかい空間は必要だと思いました」(井上社長)。

窒素の泡とともに専用サーバーで注ぐ「ナイトロコーヒー」は絶品

カフェのメニュー。スタッフの薬剤師と気楽にお話が出来る

なお、「らしくる」命名の由来は、カフェに来て健康測定・相談を繰り返す(健康のサイクルを回す)意味での「ラ・サイクル」、もう一つの意味が、その上で自分「らしく」輝いていて欲しい願いを併せたもの。「健康への関心スイッチが入ると、自らの健康投資が習慣化します。人生100年を走り抜ける人々に寄り添い、私たちは自転車に乗って、その方々の健康をサポートしていくイメージです」(井上社長)。

エクステリアのデザインでデッドスペースが中庭に生まれ変わる

元気の森が、『らしくるカフェ』の開設と合わせて着手したのが中庭の新設だった。薬を提供する棟とカフェのある建物との間にデッドスペースがあったため、その場所を人が行き来できるようにリノベーション。同時に建物の周りのエクステリアも新しく作り直した。

この時、エクステリアの設計・施工を担当したのは、同地域に根付くエクステリア専門店・㈱今井庭苑(佐々木英志社長)だ。同社は井上社長の信頼を得て、元気の森のエクステリアを自由に設計・施工した。

当初、このデッドスペースは、いわゆる〝草ボーボー〟状態で、既存の汚水桝が路面にむき出しになっていた。佐々木さんは草をすべて処分し、汚水桝は調剤薬局のブランド・ロゴを模したステッカーを貼り付けた。むき出しになった配管にはエクステリア商品(デザインシート)を巻いた。またカフェの北側にはガーデンルームを設置。さらに舗装の一部分を改修し、ガーデンルームに繋がる乱張りのアプローチを施工。既存の窓は塞いで外から看板を取り付けた。

建物の北側のガーデンルーム内は検査測定室。上州特有の強風対策も兼ねている

元気の森の周囲一帯は内科、小児科、整形外科、眼科、心療内科などが建ち並ぶメディカルタウンであり、店舗はほぼその真ん中に位置している。そうしたロケーション特性もあって、元気の森では今回のエクステリア・リノベーションに先立ち、隣の小児科医院の建築イメージに合わせて境界フェンスを撤去し、光る石をちりばめた「森の小径」も作った。

「メディカルタウンという動線の中で、元気の森が人々の健康状態を把握できるハブのような機能を提供できないかという思いが『中庭』を作るという発想の根本となっています」と語る井上社長。元気の森は単に薬を提供する調剤薬局から、未病層へのアプローチによって新しい健康への投資価値を見出すハブになろうとしている。

一方で今回設計・施工担当した㈱今井庭苑も「お陰様で、ガーデン・エクステリア業界が快適な外部空間を作ることで人々の健康寿命の向上に貢献できるという事例が出来たのではないかと思っています」(佐々木社長)と今回の成果の意義を語っている。

Interview

㈱折り鶴　代表取締役
井上拓民

街のハブ（拠点）として進化する調剤薬局
未病層が気軽に訪れ繋がっていく場所に

くやって来られたと改めて尊敬しますし、また本当に社会に貢献している姿に憧れていました。そんな私の思いがあって、当社名の「折り鶴」の〝鶴〟は、先代の名（祖父・鶴吉、母・田鶴子）が入っております。同時に鶴という言葉には、お客様に対して単にオートメーション的に薬を作って渡すといった味気ないものではなく、千羽鶴を折るような気持ちで、「早く病気が快方して欲しい」との思いを持って仕事をしようという、自らへの戒めも込められています。

「健康投資」の考え普及させたい

―その思想が薬局という業態を進化させ、「健康投資」の専門店のような存在にしていく発想に繋がっているわけですね。

井上　最重要視しているのは、未病層へのアプローチです。一般的に未病の方が健康診断をすると、例えば血糖値やコレステロール、尿酸値の結果を見て、結局は「病気か病気じゃないのか」だけを判断し、数値上の問題がなければ安心しています。しかし重要なのはそこから先で、数字上は未病であっても境界線の場合もあります。また本当に健康な人には、さらにそこから健康を持続していく必要があります。健康診断の結果一つであっても、それだけでは分からない何かを読み取らなければならないということです。そんな時に、『らしくるカフェ』に健康診断の結果を持ってきて頂くと、生活習慣のアドバイスを差し上げることが出来ます。

らしくる事業では「健康投資」の考え方を提唱していますが、これはお金の投資（資産運用）と同じような考え方です。

「健康維持には投資が必要」という考え方が普及しなかった原因の一つには、充実した日本の国民皆保険制度があり、それへの依存度が大きかった面もあると思います。しかしこれから国は医療費削減を目指し国民の自己負担率も上がるため、より一層健康に対する自己管理の重要性が増してきます。私はむしろ、そのことを前向きに捉えるべきだと思っています。未病の段階で若いうちから健康を学び健康に投資していく人達が増えていき、その結果、私たちはハブとしてそのお手伝いをしていく存在になり得るということです。

「カフェで気軽に健幸チェックしてみませんか？」のPOP

―病気になった時に診てもらうのがお医者さんだとすれば、健康な人が持続的にチェックに行くのが、調剤薬局という流れを作るということですね。

井上　薬剤師の役割も、大きく変わってきています。調剤のスペシャリストであると同時に、色々な引出しを持った生活指導ができるジェネラリストとしての存在価値が、今の薬剤師には求められています。したがって、『らしくるカフェ』は新しい事業というより、薬剤師の役割を広げ、お客様や患者様

―まず、調剤薬局であるにも関わらず、一見すると薬とは関係なく思える「中庭」を作り、そして『らしくるカフェ』事業を展開するのか、その根本にある思いを聞かせて頂けますか？

井上　今の薬局に対する世間の見方は、基本的には処方箋を持っていく場所です。なぜなら、調剤薬局とうたっているから当然ですよね。しかし今の時代は、それが縛りになっていて、自ら首を絞めているとも思っています。

ただし当社は、祖父の時代も母の時代も、薬局は街なかのオアシスであるべき、という思想で受け継がれてきたグループです。経営者となった今、その当時を振り返ると、先代は薄利でよ

に喜んで頂ける事業ということです。幸いなことに、薬剤師は勉強熱心で真面目でレベルが非常に高いことが大きな誇りです。なので、こうした道さえ明確に示してあげれば、さらに社会貢献をしてもらえると思います。

エクステリアに思う「余白」「はみ出す部分」の重要性

―「中庭」、そしてエクステリアはどのような価値があると思いますか？

井上　物事には何でも「余白」や「はみ出す部分」が大切だと思っています。時間や空間でも、いい意味での〝無駄〟があるべきなんです。『らしくるカフェ』とこの中庭も、余白として街の中で繋がっていく場所にして行くことが最終的な目標です。

『らしくるカフェ』ではコロナ禍になる前に、星座を観察するイベントも開催しました。その企画自体は薬局業務とは全く関係ないのですが、人が集うことで得られる幸せ、つまり〝健幸〟という形もある訳です。世の中、AIやIoTで何でも合理的になる中で、私はそうした余白はとても重要だと考えています。その意味でエクステリアの存在は、とても価値が高いと思っています。

視点

調剤薬局が果たすべき「社会への貢献」
㈱折り鶴・井上社長の経営思想

普段、私たちが病院や医者に行くと、ほとんどのケースで薬の処方箋をもらうだろう。薬は病院ではなく調剤薬局で提供されることが多いはずだ。これを「医薬分業」制度と呼んでいる。つまり、薬の処方と調剤を分離し、それぞれを医師、薬剤師という専門家が分担して行う方法だ。

この制度は欧米先進諸国では徹底されており、様々な歴史的経緯に基づき、「病院で薬を出していけない」との〝全面的医薬分業〟制度設計となっている。ただし日本は、そこまで徹底されていない。日本は歴史的にずっと医者が薬を司ってきており「医薬分業」は義務でなく、医師の判断で薬を院外で出す、院内で出すということを決められるのだ。つまり調剤薬局は、病院や医師にその命運を握られていると言っても過言ではない。

そんな調剤薬局を取り巻く環境を見てみると、日本の薬局は現在6万店舗ある。経営面においては、医療費削減が求められる中で、ジェネリック薬品の普及、薬価引き下げや調剤報酬の下落などで調剤薬局の利益は縮小傾向にある。さらに一昨年には、薬剤師でなくても調剤業務が可能な〝調剤補助員〟による業務も可能となる制度改正が行われたため調剤価格も安くなり利幅が薄くなってきた。

井上社長は、こうした医薬を取り巻く長期的傾向にずっと危機感を覚え、長年にわたり、業界の常識では思いつかないような新しいアイデアを創出し、常に新しい調剤薬局のビジネスモデルの開拓を続けている人物だ。

「調剤薬局はこれからますます『かかりつけ薬剤師』としての機能強化が求められています。そもそも薬局は宣伝も自由で、フリーランスな事業が可能な小売業。お医者さん依存体質から脱し、お客様・患者様から感謝される薬局でないと淘汰されるでしょう。調剤薬局の価値を高めることで、お医者さんからはパートナーとして認められた上で、未病段階での〝健康投資〟の考え方を共有頂けるような関係性を築きたいのです」（井上社長）。そうした中で社長が着想したのが、らしくる事業であった。

「これからの時代は、ウェアラブル端末が普及し、各個人の健康情報もビッグデータとして集約されてくると思います。また今や体組成や血糖値もAIによって人が血液を採取せずに測れるし、アメリカではIoTが心房細動を早期発見して何人もの命が助かるという事例も出ています。ただ、これからはそういう時代だからこそ、AIやIoTとは真逆の、人の温かさが伝わる問診やカウンセリングにこそ、大きな価値が生まれてくると思うんです。『らしくるカフェ』は、そうした思いを持って地域貢献していく事業なのです」（井上社長）。

現在はコロナ禍だが、井上社長はこの時期だからこそと前向きに捉え、さらに新しいビジネスモデルを考えている。やがては事業に賛同する全国の調剤薬局や薬剤師にも声を掛けネットワークを作る構想もある。また未病層アプローチに関しては、中小規模の企業経営者層を対象に、自動車の車検制度のようなサービス展開も構想中だという。

医療と健康の世界が今後ますます変化していく中で、井上社長の視線の先には、人と地域を繋ぎ、さらには国や行政とも連携して健康寿命を長くしていく機能を持つランドマークとしての調剤薬局の姿があるに違いない。

薬剤師スタッフとともにカフェ中庭で―写真手前中央はエクステリアを設計・施工した今井庭苑・佐々木さん